



袖  
張  
志  
久  
連

全

耕雲主人追悼

袖乃時雨

土佐左川  
鳥巢齋歸奇選



美言りこまかりぬる  
と傳へて

枯たのからその名を

結さる尾室の邸

采真主人

右の特記の多難さのあまめ  
りこまふ出さ

巻之四 季

朝晴や若一をのこけ子の新

何もせぬ志入やさしつる世

尚所より結露よこ能やせ秋の世

古寺此門あり渡し冬乃月

耕雲云々季由老人も弱冠乃  
 比すめて性風旌り志を高く  
 五竹老休をもく免世々のふはふ  
 久と通して改ら此をを伝へ此地  
 正門の古きをかりり事よも  
 君命よりして法神徳色の海あり  
 花を月言ふその樂いふありあり  
 古き一文化の西の神守り月  
 をわらふも病の二床は浮世の夢を  
 見果むるも悲む一さの生者  
 必滅のあひ會者定ん難の怨  
 いんも一なりりあや三七りに  
 少中まに此地の社中を法して進善  
 此法道を傳ふる孝子雨朝子  
 一徳と

手向やもはらふ此二雨其子

釋

活鶴

袖の耐雨のそしすりと種る

雨朝

蒼蒼<sup>ウリ</sup>芥<sup>アキタ</sup>さかき<sup>アキタ</sup>を<sup>アキタ</sup>峯<sup>アキタ</sup>の<sup>アキタ</sup>あつ<sup>アキタ</sup>ま<sup>アキタ</sup>め<sup>アキタ</sup>

歸奇

外畑へ通ふ道のみけ捨

尾白

逗留の舞とおくふなをを伝へ

為蹊

捨<sup>ステ</sup>と扇の<sup>ステ</sup>もく<sup>ステ</sup>久<sup>ステ</sup>一<sup>ステ</sup>め<sup>ステ</sup>

如陶

さ<sup>ウ</sup>め<sup>ウ</sup>り<sup>ウ</sup>か<sup>ウ</sup>る<sup>ウ</sup>柳<sup>ウ</sup>ふ<sup>ウ</sup>月<sup>ウ</sup>乃<sup>ウ</sup>鮮<sup>ウ</sup>を<sup>ウ</sup>さ<sup>ウ</sup>

古松

流<sup>ウ</sup>る<sup>ウ</sup>傳<sup>ウ</sup>一<sup>ウ</sup>き<sup>ウ</sup>山<sup>ウ</sup>本<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>秋<sup>ウ</sup>

芦笛

起亦も心の儘に物に任る

奇仙

交まひて世を石と取らる

商陸

すら〜と十の間にやまを流の上

如洗

あゝ夢の中ふく〜入お

子峯

外あも積りのおれは〜麦

居竹

あゝ〜まひ〜う〜後あゝの〜

春里

揺ら揺ら中へ〜を〜と〜

雨晴

隅りす〜と直治中り〜世也

里童

花を〜草う軒塔の非さ〜

花友

き〜う〜い〜系〜此〜丸〜目〜先〜を〜ま〜ま〜

侶禽

二 殿ま〜此〜法〜理〜を〜並〜出〜る〜能〜の〜宴

如柳

〜と〜ふ〜燃〜火〜の〜な〜を〜か〜ま〜う〜ぬ

布川

一 ま〜ら〜雨〜も〜係〜は〜此〜齋〜お〜ら〜し

巴溪

皆 踏 き け け け け け け 牛

興宇

ほ〜う〜の〜若〜れ〜た〜ま〜の〜す〜あ〜け〜ま〜の

盛く

と〜ら〜ら〜ら〜む〜句〜句〜の〜友

若朶

梅もさやみまらうとまきふん

知先

入江の岩より成る智多答

野牛

言欄の籠素入り身とかしら

亀年

飲中つともよみ菜もてまら

興池

香のしは力に思まよやとあそ

左涼

菊をすも木末賊ういし

芦舟

孝<sup>ニウ</sup>りよま海つと移りぬ授うら

孤竹

あやせもなき鈍子お器

楚狂

西門とまに能りた叙の形あり

志外

岬<sup>ミサキ</sup>もらに海の水ぬく

雀子

怨<sup>ウレ</sup>しむらむら目ふ浮むとあ友

蘭雀

永き筐よりまきけあ<sup>クキ</sup>量

和光

右歌仙行

骨と埋忍ももろとつますと  
しる季由き人か生か此種と  
かこい

積一世の徳くやまぬを佛

無物菴  
古松

耕云まを此地り山門の古老  
みかた四季おくは風光り  
此邊と先きく山あり極  
味く深く此交り出りらさめ  
事く惜むへ世を流りかきれ  
事くとりや三七ふあふ

杖笠や一きりふあを塚站

金草亭  
蘭雀

耕雲老人八段り杖笠の古衣  
拂いでせり一肩衣乃利座と遊  
歌も稀や七十五餘りて又耕  
益壯らるるよめ花のまき月此秋  
まことなり一啼りもまはれ  
一は来いと回せりまきり神守  
の末をかくす流士の旅りこの世を  
辞一せると色を暮し

彼岸の雲より来りて友然

鳥巢  
歸奇

耕を以て爲すは百姓の困るより予ら  
みること忠言をせらるるは世に  
海より遠くもやれりや  
いんさきとせらるる神の月の  
末の風のりさき  
莫らぬは縁の趣きもいんさき

一〇〇〇〇の増ふりまらふ

樂静堂

和光

家君と古神の歌をよむ玉を  
おぼやかしやうんあまの  
ついでにふれりまを  
おぼやかしやうんあまの  
おぼやかしやうんあまの

おぼやかしやうんあまの  
おぼやかしやうんあまの  
おぼやかしやうんあまの  
おぼやかしやうんあまの  
おぼやかしやうんあまの

男

消しせしやうんあまの

雨朝

おぼやかしやうんあまの

二男

とらふ事問んども言佛

里童



あまの

手向ともや 塚より自然の空は巻

蘭亭 左涼

平煙りも冬枯をみ 塚のま

葛松亭 花友

餘興

すむ月如彩をなれり 氷る糸

葛松亭

風たゆむ 柳流のうらうら

河東

世流りも細く針をよる 鶴のうた

其書

右短哥行下畧

名録

各悼の句あり 亥下略

水多の踏かく岩やと 秋の雪

法超

市ゆり子ハ牛の習ふ冬は月

古松

秋ハ心悲急ハ 旅中條の字をさし

沙来

吹雪くく 星当高し 秋の空

伝来

木枯や 吹雪をみらふ 啼 鶉

已流

卯のむねおきりめりし山嶺東  
 松風を釜より吹せし雪の音  
 妻背より子の柏子のあけりくま  
 けし秋や鳥のえはむ木古柳  
 朝露のまきや早秋ふまは  
 朝露より羽をける季秋の蝶  
 稲株ふよむお白く九月を  
 笠の幌さうとくまはくも嵐

出雲  
 氏喜  
 鹿牛  
 為頭  
 如洗  
 若留  
 古涼  
 若菜

白を此ちきりてお秋の風  
 波より咲あふ草すや楳具  
 暎るまの秋の松やとく栗  
 漕く舟も志しきあの時を  
 明草乃を後より藤癖や廿秋の世  
 危回くしりも留りし虫の音  
 弁くくちをぬ程の雨も涼  
 立雪ふもふきし庭や軒の雲

子峰  
 如陶  
 和光  
 無地  
 居林  
 氣平  
 持狂  
 孤竹

ちや、誠の葉の忠捨る者や、朝露  
 暮雨り、一息し、人の業り、  
 山畑や、縁ふ、抄こむ、菱お葉  
 毎の、葉ふ、ふく、ふく、ふく、ふく、  
 夏は、日や、おあも、な、あ、あ、  
 秋は、つ、つ、つ、つ、つ、つ、  
 破鏡の、ちも、殊、緒り、一、空、念佛  
 沈ぬ、ふ、お、一、唐、く、柳、柳、  
 女、妻、里

冬枯と、三保あり、あ、あ、あ、  
 常も、老く、く、朝、露、や、  
 何、様、り、一、手、お、添、く、  
 秋、や、う、ら、う、ら、う、ら、  
 お、と、と、と、と、と、と、  
 涼、一、と、と、と、と、  
 朝、の、つ、つ、つ、つ、  
 よ、う、う、う、う、う、う、  
 雀、子  
 朝、先  
 雨、朝  
 里、亭  
 志、外  
 尾、白  
 宗、友  
 由、奇

文通

花鳥や 立木の影も丸む付

高知 樵坡

星はくく 嵐の晴を柳うふ

玩世

燭り成る 極楽もさふ念ふ念佛

慶字

紅葉の市なり ぬれたる時雨は

以玄坊

角力らのをくわ 波もなほ海原

秋化房

新道と舟とくらくて 故きり哉

香宗 如水

あまきく 果は白玉羽よりこころ

室原 知声

秋風や浪り 鷗乃屍より

上川 起墨

海面乃風や 黒く秋隣

加持 玉樹

埋火も厚くあり 今きりくま

入野 素白

水も此汀ふあまき 空さく

久保川 左流

娘くく 鱧ふく 魚やぬると川

伊野 松有

揚るものこふ 二つある 孝不

宇佐 里朝

録する 柳より 白葉の一そらふ

宇佐 風和坊

文通

花白や 立木の影も丸む付

高知

樵坡

星はさく 嵐の晴ま柳うさ

玩世

燭り残る 極楽もさふ 念ふ

慶字

紅葉賣の市より ぬ水たふ 雨は

以玄坊

角力おのをくや 波もな 深江

秋化房

新道ま 舟をくくく 故妻うさ

香宗 如水

あまきく 果は 四玉羽ま ころり

室宗 知声

いのかしを案も信名の指次也

越後行脚  
友和坊

力のとも、  
和光

美濃  
一樂卷

文化十二年甲戌仲春之吉授筆於  
樂靜堂窓下

和光

右先大人追悼一卷男雨朝謹命副刷

和田萬齋墓碣銘并叙

文化十年癸酉十月二十日和田敬吉  
勝甫卒享年七十三葬于海岸山  
矣男迪典請余之銘於碑余雖陋乎  
與勝甫有故則不辭焉和田氏其先  
紀人來于左川 命為市老世々相承  
至伊兵衛配永野氏無子請士井彦六  
季子養以為嗣即勝甫也母梅原氏

勝甫為人和而敏常竭力於所養猶  
所生是以稱於鄉黨寶曆十三年為  
市老 賜賞者數最樂賦詠旁好  
茗燕雖頗鞅掌然時汎會同志輒  
相忘於勢矣而未嘗荒也久而僚  
及益重之文化五年以老免初号清  
右衛門更曰辰右衛門後稱萬兵衛既  
免逃禪於物外 賜號萬齋然而

其誨孫子必循々不倦也初配卒繼娶  
永野氏生中和先卒次迪典嗣為市  
老次女適甲藤孝五次常德其銘曰  
理家守官維德有鄰吟詠耽古陶  
字厥身老而能教永世其遵

黑巖順撰

和田義敬書

勝甫為人和而敏常竭力於所養猶  
所生是以稱於鄉黨寶曆十三年為  
市老 賜賞者數最樂賦詠旁好  
茗燕雖頗鞅掌然時況會同志輒  
相忘於勢矣而未嘗荒也久而僚  
及益重之文化五年以老免初号清  
右衛門更曰辰右衛門後稱萬兵衛既  
免逃禪於物外 賜號萬齋然而



調和  
世路



蕉門書林

皇都寺町通二條

橘屋治兵衛梓

